

經濟分析入門

——理論・學史・經濟史——

財展圖書(日)

1 151

有斐閣雙書



298665

經濟分析入門

——理論・學史・經濟史——

富塚良三編



有斐閣雙書

入門・基礎知識編

は し が き

本書は『経済分析入門』と題されているが、通常のいわゆる「入門書」や「解説書」とは異なって、かなりに高度で包括的な内容を含むものとなっている。叙述はできるだけ簡潔、平明でなければならないが、しかし内容的には密度の高いものでないと、これから経済学を学ぼうとしている人たちの折角の学的興味を失わせるおそれがあるのではないかと考えたからである。

社会科学としての経済学は、体制を与件として前提してその機構のもとで展開される経済現象を論ずるというだけでなく、与件である体制そのものを分析対象とするのでなければならない。資本主義とは何か、それは人間存在にとっていかなる意義と限界をもつものであるかという根本的な問題意識と、資本主義体制を全体としてそれに固有の問題性において把握するという広く包括的な問題視角と、資本主義の成立から現代資本主義にいたるまでの歴史的展望と、およそそうした、語の本来の意味における批判的・客観的な且つ包括的な方法態度が、社会体制分析の学としての経済学には要請されるのである。われわれが1870年代のジェヴォンズ、メンガーおよびワルラスによる「限界革命」以降のいわゆる「近代経済学」の方法に対して批判的ならざるをえず、また、スミス、リカードによって代表される古典経済学の批判的再構成として（「限界革命」とほぼ同年代の頃に）展開されたマルクスの『資本論』体系をもって社会科学としての経済学の基礎をすえたものとするのは、まさにこの理由による。その基礎を確定し、さらにそれを発展せしめて、われわれをとり巻く現代資本主義の諸問題の解明がなされなければならない。

2 はしがき

本書はそうした資本主義分析への入門書である。

社会科学としての経済学を理解するには、経済理論を研究するだけでなく、それと併行して経済学説史および社会思想史と、社会経済史の研究成果を学ぶことが必要であるし、また効果的でもある。できれば、理論・学史・経済史の三位一体の展開がなされうれば、経済学の真髄を理解するのに最も効果的であろう。だがそれには、専門を異にする多数の研究者の「分業にもとづく協業」が必要である。本書が編著という形をとったのは、こうした理由による。

国際通貨体制の不断の動揺と「スタグフレーション」(不況下のインフレーション)の進行。戦後世界の資本主義体制も、いまや大きな転換期を迎えつつあるかにみえる。こうした事態を反映してか、アメリカの経済学界にも、「新古典派的総合」の限界と数学パズルの思考の空しさから脱皮して、マルクス経済学説の再評価にむかおうとする気運がみられるという。経済技術学的な手法が支配的であったアメリカ経済学界の一角にも、ようやくにして社会体制分析の学としての経済学が芽をふき根をおろし始めたのであろうか。

他方、その工業生産力水準に比して依然として低い賃銀水準と貧弱な社会保障、二重価格制、「公害たれ流し」、およそそうした inhuman な諸条件を武器としての日本資本主義の世界市場進出(それは、まさに、低賃銀・低社会保障・公害ダンピングである)も、ようやくにして、国際的な非難と規制を受けつつあるかにみえる。戦後日本経済の「高度成長」は、資本主義的な経済組織のもつ workability をあらためてわれわれに認識せしめる側面をもつと同時に、その否定面をいよいよというほど知らせるものであった。疎外と公害と不断の物価騰貴のもとでの「エコノミック・アニマル」たることに、いまや人々は深い疲労と疑惑を感じ

つつあるといってよいであろう。資本主義とは何か、それは人間存在にとっていかなる意義と限界をもつものであるか、という根本的な問がいまこそ発せられなければならない。そうした問は、なんら高踏的なものではなく、きわめて日常的な問なのである。社会科学としての経済学は、資本主義の構造と動態を明らかにすることによって、そうした問に答えようとするものでなければならない。問題は根本的に、したがってまた全機構的に発展的に、提起され把握されなければならないのである。本書は、そうした社会科学としての、人間の学としての経済学への入門書として、企画されたものである。経済史、経済学史、経済学基礎理論、独占段階・現代資本主義分析の、各専門分野の研究者——それも現在の学界をリードしつつある第一級の研究者——に、上記の問題意識と視角からする分担執筆をお願いした。各編の各章がそれぞれに専門的な深い研究に支えられた独立の読物となっておりと同時に、全体として一つの体系をなすようにというのが編者のねらいであった。その構成は、目次を一瞥することによってこれを知ることができるであろう。

だが、はたして本書が、人間の学としての経済学の面白さを読者に十分につたえ、経済分析にたいする学的興味と情熱をかきたてるようなものになりえているかどうか、それは読者の判定に委ねるのほかはない。

終りに、貴重な研究時間を割いてこの企画に御参加いただいた執筆者の方々に深く感謝の意を表したい。なお、有斐閣の涌井義治氏および米井繁子さんにも大変お世話になった。この機会に厚く御礼を申し上げます。

1972年4月

編 者

執筆者紹介(執筆順)

おか	だ	とも	よし	(東京大学社会科学研究所教授)	〔第1章〕
岡	田	与	好		
よし	おか	あき	ひこ	(東北大学文学部教授)	〔第2章〕
吉	岡	昭	彦		
た	ぞえ	きよう	じ	(福島大学経済学部教授)	〔第3章〕
田	添	京	二		
よし	ざわ	よし	き	(専修大学経済学部教授)	〔第4章〕
吉	沢	芳	樹		
はつ	とり	ふみ	お	(東北大学経済学部教授)	〔第5章〕
服	部	文	男		
おお	き	けい	じ	(立教大学経済学部教授)	〔第6章〕
大	木	啓	次		
かわ	なべ	まさ	とし	(立教大学経済学部教授)	〔第7章〕
川	鍋	正	敏		
しま	さき	み	よ	(中央大学商学部講師)	〔第8章〕
島	崎	美	代		
やま	だ	き	し	(国学院大学経済学部教授)	〔第9章〕
山	田	喜	志		
つる	た	みつ	ひこ	(中央大学商学部教授)	〔第10章〕
鶴	田	満	彦		
い	むら	き	よ	(慶応義塾大学経済学部教授)	〔第11章〕
井	村	喜	代		
にし	むら	しず	や	(法政大学経営学部教授)	〔第12章〕
西	村	閑	也		
ほ	し	まこと		(東京農業大学助教授)	〔第13章〕
保	志	恂			
くま	がい	かず	お	(明治大学経営学部教授)	〔第14章〕
熊	谷	一	男		
きた	はら	いさむ		(慶応義塾大学経済学部教授)	〔第15章〕
北	原	勇			
おお	しま	ゆう	いち	(名古屋大学経済学部助教授)	〔第16章〕
大	島	雄	一		

目 次

第 1 編 資本主義の成立と経済学の展開 1

第 1 章 資本主義の成立(1)

——封建社会の解体，原始的蓄積と市民革命——

..... 2

はじめに 2

1 資本主義とは何か 3

2 産業資本と封建的土地所有 5

3 資本主義形成の歴史的前提 8

4 小生産者の蓄積と商人資本的蓄積 12

5 原始的蓄積と絶対王政 14

6 市民革命と資本主義の発展 16

第 2 章 資本主義の成立(2)

——産業革命と資本主義的生産の確立—— 19

はじめに 19

1 工業の変革と工場制度の成立 20

2 農業革命と土地所有の再編成 23

3 過渡的恐慌と穀物法 26

4 資本主義的生産の確立と古典的世界市場の成立 28

第 3 章 経済学の成立(1)

——経済学の生誕—— 35

6 目 次

はじめに	35
1 初期重商主義とトマス・マン	36
2 イギリス革命とベティ	37
3 本源的蓄積の経済学	40
4 「文明社会の危機」とステュアート	42
5 アンシャン・レジュームとケネー	45
6 スミスにおける古典経済学の成立	48
第 4 章 経済学の成立(2)	
——古典経済学の確立と解体——	53
はじめに	53
1 1815 年恐慌とマルサス対リカードウ	54
2 リカードウの発展的社会像——資本蓄積と賃銀 の動態	60
第 5 章 社会科学としての経済学の確立	75
はじめに	75
1 マルクス主義成立の歴史的条件ならびに思想的 源泉	76
2 マルクスおよびエンゲルスの経済学研究の歩み	80
3 『資本論』への道	87
第 2 編 資本主義経済の基礎理論	95
第 6 章 資本主義経済の基礎構造(1)	
——商品と貨幣——	96
はじめに	96

1	商品の二要因——使用価値と価値	97
2	商品であらわされる労働の二重性	100
3	価値形態または交換価値	102
4	商品の物神的性格とその秘密	108
5	交換過程	109
6	貨幣の価値尺度機能	112
7	貨幣の流通手段機能	113
8	貨幣としての貨幣	117

第 7 章 資本主義経済の基礎構造(2)

	——資本と利潤——	121
	はじめに	121
1	貨幣の資本への転化	123
2	剰余価値の生産	126
3	不変資本と可変資本	128
4	絶対的および相対的剰余価値	129
5	賃 銀	131
6	資本の循環	132
7	資本の回転——固定資本と流動資本	134
8	剰余価値の利潤への転化——費用価格と利潤	137
9	利潤の平均利潤への転化——生産価格と平均 利潤	139
10	商業資本と商業利潤	143
11	むすび——俗流経済学の三位一体的範式	144

8 目 次

第 8 章 資本主義経済の動態(1)

——資本蓄積と雇用・失業ならびに賃銀率の 変動——	147
はじめに	147
1 資本関係の再生産——単純再生産	148
2 拡大再生産	150
3 資本の有機的構成と労働力需要の変動	152
〔補説〕 古典派雇用理論とマルクス	161

第 9 章 経済循環・再生産の構造

——再生産表式と産業連関表——	165
はじめに	165
1 社会的総生産物の配分と資本関係の再生産	166
2 再生産表式とその前提	167
3 単純再生産——再生産表式(1)	168
4 拡大再生産——再生産表式(2)	172
5 産業連関表	178
6 再生産と国民所得	179
7 「国民所得論」批判	182

第 10 章 資本主義経済の動態(2)

——資本蓄積と有効需要——	185
はじめに	185
1 資本蓄積をめぐる古典的論争——マルサスと リカードウ	186

2	拡大再生産における生産構造……………	190
3	拡大再生産における需要構造……………	192
4	均衡蓄積額と均衡蓄積率……………	195
 第 11 章 資本主義経済の動態(3)		
	——資本蓄積と産業循環—— ……	201
	はじめに ……	201
1	商品生産と「実現問題」……………	202
2	資本制生産と「実現」問題——「生産と消費 の矛盾」……………	204
3	「生産と消費の矛盾」の累積機構——「第 I 部門 の不均等的拡大」……………	210
4	産業循環 ……	215
 第 12 章 利子と信用制度 ……		
	はじめに ……	223
1	利子生み資本と利子……………	223
2	擬制資本 ……	226
3	預金創造の過程……………	227
4	国内金融と国際収支……………	233
5	中央銀行の金融政策……………	236
 第 13 章 土地所有と地代 ……		
	はじめに ……	239
1	本源的所有とその解体……………	239
2	封建地代の諸形態……………	240

3 農民的分割地所有の解体と近代的土地所有の成立	242
4 差 額 地 代	243
5 差額地代第二形態	245
6 絶 対 地 代	248
7 土地国有と地代	250
第 3 編 現代資本主義の分析	253
第 14 章 金融資本の成立	
——独占資本主義段階、金融資本の諸類型——	
.....	254
はじめに	254
1 資本主義の独占資本主義 = 帝国主義段階への移行	254
2 イギリス金融資本の形態的特質	257
3 ドイツ金融資本の形態的特質	260
4 アメリカ金融資本の形態的特質	263
5 金融資本の形態変化	266
第 15 章 現代資本主義の構造と動態(1)	
——寡占的巨大大企業の価格管理と投資行動——	269
はじめに	269
1 独占的市場構造と価格管理の可能性	270
2 寡占企業による価格管理政策	272
3 資本蓄積の停滞化基調・資本過剰の慢性化	

	——独占段階における資本蓄積・生産力発展の特徴(1).....	277
4	飛躍的拡大の局面——独占段階における資本蓄積・生産力発展の特徴(2).....	283
5	帝国主義的対外膨張と資本蓄積.....	287
第 16 章	現代資本主義の構造と動態(2)	
	——管理通貨制度とインフレーション—— ...	291
	はじめに	291
1	国家独占資本主義の成立とその本質.....	292
2	国家独占資本主義と管理通貨制度.....	295
3	インフレーションの基礎的規定.....	297
4	管理通貨制度とインフレーション.....	299
5	冷戦体制と IMF	303
6	帝国主義の終焉と社会主義の展望.....	306

第**1**編 資本主義の成立と経済学の展開

第 1 章 資本主義の成立 (1)

——封建社会の解体、原始的蓄積と市民革命——

はじめに

近代資本主義社会——その運動法則の解明が経済学を中心課題であるが——は、封建社会から産み出された。この過程の主内容を、資本主義の母国イギリスにおける産業資本の形成、いわゆる「資本の原始的蓄積」に焦点をしばって考察するのがここでの課題であるが、この過程の理解をめぐって、これまで種々の対立した所説が提示されてきたので、できるかぎり、それらの対立点と、そこに含まれている問題内容を明らかにすることに留意したいと思う。

したがって、この過程を構成している複雑・多様な史実の詳細な紹介はほとんど省かれているが、それらについては、数多くの経済史の研究書が取り扱っているので、それらを参照されたいと思う。当面、本章における主要関心は、封建制から資本主義への移行過程における、産業革命期に先行する二つの重要な画期、すなわち、中世から近代への転換期と、市民革命期の歴史的意義を明らかにすることに集中される。

1 資本主義とは何か

今日われわれは、「資本主義」に関する山なす研究書と評論をもっている。それだけではない。この用語は、義務教育段階である中学校の教科書にも登場し、全国民の常識語となるに至っている。しかもこのばあい、この用語でもって、社会主義との対比において、日本をも含む、欧米「自由諸国」の近代的社会体制を特徴づけることが、わが国の通例である。このような事情は、一見推測される以上に重要な意味をもっているように思われる。この意味を幾分でも明らかにするために、この用語をめぐる研究史を一瞥しておきたいと思う。

産業革命研究の権威としてわが国でも著名なイギリスの経済史家、アシュトン(T. S. Ashton) は、産業革命の開始期である18世紀のイギリス経済史を、資本主義という用語を全然用いることなしに叙述したことを誇りとしたことが、まず注意されてよいであろう。彼は、「資本主義」のような、体制の全体としての特徴を一括しようとする概念が、多様な諸要因のからまり合いを通じて展開される複雑な歴史的諸変化の具体的な理解を妨げることを強調するのであるが、この観点が、歴史の社会主義的解釈と、それに基づく資本主義の取扱い方の不当性を排除しようとする、彼の実践的意識と深く結びついていることも、疑いない。このように、西ヨーロッパの学界では、この用語の使用そのものが嫌忌されるという一定の傾向が根強く存しているが——またそれは、近代経済理論の中心諸概念が、歴史的・相対的諸要素と無縁な抽象面で形成される一般的傾向と対応するが——これは最近にはじまったことではない。1926年に、R・H・トーニーが名著『宗教と資本主義の興隆』(*)を公刊したさいには、彼は、政治的キャッチ・ワードの歴史研究への導入として非難されねばならなかった。

(*) R. H. Tawney, Religion and the Rise of Capitalism, 1926.

4 第1編 資本主義の成立と経済学の展開

たしかに、資本主義という用語は、マルクス(K. H. Marx)によるブルジョア経済学の、したがってまたその前提である近代ブルジョア社会そのものの体系的批判のなかで産み出されたものであり、その意味で、それは社会主義の思想・運動と不可分である反面、体制維持の観点からは、近代社会の歴史的相対性を強調するこの用語の概念は拒否されるべきものであった。それゆえ、社会主義の成長とともに資本主義の用語が普及し、それに対応して、この用語で特徴づけられている歴史的諸事実とその意義を学問的に吟味することが不可避となっていくにつれて、他方では、その概念内容の重大な修正・変更を通じて、資本主義の——歴史的・相対的性格の否認を含むような——遍在性の強調が試みられていったことは注目に値しよう。周知のように、マルクスは歴史の諸時代を社会的生産様式を基準として区分し、近代ブルジョア社会に固有な、この社会の構成を規定するところの生産様式を資本主義ないし資本主義的生産様式として特徴づけたのであり、かかるものとしてそれを、中世封建制と社会主義(的生産様式)との間の段階として位置づけた。しかるに今世紀初頭に西ヨーロッパ歴史学界で「資本主義」に関する実証的研究と論争が活発化したさいには、マルクスのばあいとは対照的に、「中世資本主義」や「古代資本主義」が「近代資本主義」と並んで問題とされ、こうして、いまや資本主義の新しさではなく古さに関心を集中しつつ、資本主義を、近代に独自なものとしてではなく、人間活動の普遍の様式と見なすべきことが強調されることとなった。

このような事情は、西ヨーロッパ歴史学界の資本主義概念が、その真の創始者であるマルクスのものではなく、その導入によって、ドイツ歴史学派の経済発展段階説の再構成をはかった、ゾンバルト(W. Sombart)のものを出发点としたこと、その結果、資本主義の一側面にすぎない利潤追求という要素を、それをとりまくもろもろの歴史的諸条件から切り離しつつ、それ自体で資本主義の本質を形成するとみなす傾向が有力化したことにもとづいている。ゾンバルトの用語でいえば、中世的経済原理である「欲求充足の原理」